

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

——五之巻一「昔は抹香けむたからぬ夜咄」の狐釣りを中心に——

王 欣

はじめに

明和三年（一七六六）に刊行された上田秋成の浮世草子作品『諸道聴耳世間狙』^①（以下、『世間狙』と略称する）は短篇十五話からなる。

その『世間狙』五之巻一「昔は抹香けむたからぬ夜咄」の平野屋七左衛門の人物造形については、従来、『浮世親仁形氣』^②（以下、『親仁形氣』と略称する）巻三の二「飛行を楽しむ仙人親父」の藤井元徳、『当世癡人伝』^③（以下、『癡人伝』と略称する）巻二「万金丹」の万金丹との関連性が論じられてきた。だが、『世間狙』五之巻一の物語の展開上、重要な役割を果たしている「狐釣り」というかたりの手口は、『親仁形氣』巻三の二でも、『癡人伝』巻二でも確認できない。

一方、「狐釣り」という趣向の使用によって、『世間狙』五之巻一と謡曲『殺生石』^④、狂言『釣狐』^⑤、浄瑠璃作品『玉藻前曦袂』^⑥（以下、『曦袂』と略称する）との関連性が指摘されている。しかしながら、これまでの研究は、『世間狙』五之巻一と演劇作品との個々の趣向の類似性を指摘する段階で止まっている。管見の限り、物語の展開における『世間狙』五之巻一と演劇作品との共通点に関する考察は、未だ行われていない。

『世間狙』五之巻一の「今にもあれ玉藻の前が二度の勤にて御惱ならせられた時」という設定からみれば、『世間狙』五之巻一の狐釣りの場面と玉藻前との関連性が考えられる。『世間狙』の開板願書が出された時期明和元年（一七六四）十一月までに、上方で上演された演劇作品の中で、玉藻前と関連し、狐釣りの場面が設定された作品として、謡曲『殺生石』、浄瑠璃作品『殺生石』^⑦、『曦袂』、歌

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

五八

舞伎作品『玉藻前囃の袂』（以下、『囃袂』と略称する）が挙げられる。^⑧『世間狙』五之卷一の狐釣りの話を持ち出し、人を騙すという物語の展開は、どの演劇作品と一番強い関連性を持っているだろうか。

右記のような問題を解決するため、本稿においては、『世間狙』五之卷一の物語の展開に考察を加えることで、『世間狙』五之卷一の七左衛門が「古狐」にたとえられ、狐釣りの話に騙されるという物語の展開が、演劇作品『囃袂』と、最も強い関連性を持っていることを究明したい。

一 『親仁形氣』卷三の二、『癡人伝』卷二、

室町物語『玉藻前』との関連性

『世間狙』五之卷一の平野屋七左衛門が、人物造形において、『親仁形氣』卷三の二の藤井元徳、『癡人伝』卷二の万金丹と似通っていることは、高田衛『上田秋成研究序説』^⑨、徳田武『秋成の隠微——『諸道聴耳世間狙』に即して——』^⑩で指摘された。確かに、主人公がけちであること、わなの仕掛け人の存在、わなにひっかかることという三つの設定において、『世間狙』五之卷一は、『親仁形氣』卷三の二、『癡人伝』卷二と一致している。

ところが、『世間狙』五之卷一の物語を貫く、メインに据えた事件は、「狐釣りを見物する」ということである。

今にもあれ玉藻の前が二度の勤にて御悩ならせられた時。(中略) 明晩今一度釣てお目にかけて申そう。重ねてはきつとなりませぬと。きつい恩にさせられましたとしたり顔にて咄せば。七左衛門大きに悦びそれは段々の御はたらき。左様な重い事を履ひ質なしに見物いたすは全く其元のお影ゆへ

〔『世間狙』五之卷一〕(傍線引用者)

「今にもあれ玉藻の前が二度の勤にて御悩ならせられた時」という内容からみると、『世間狙』五之卷一の狐釣りを見物するという事件の発端は、玉藻前に化けた狐を退治しようと偽ることである。

一方、『親仁形氣』卷三の二では、仙術の秘伝が教えてもらえるという偽りが、事件の発端である。

「旦那には兼て仙術を學ばんと思しめしたつ由、はゞかりながら御自身千年萬年御工夫なされたればとて、何とて御一人其の術を知り得たまはん。(中略) 私伯父が申せしは、只今は年を切つて主取りいたしてゐる身なれば、重ねていとまを貰ひ、瘦世帯でも持った時分、大晦日に借銀乞ひが来てせがむ折、世帯道具を腰に付け、鶴に乗つてこなたの方へまゐらうと約束をして、仙術の秘傳を書きし一巻を貰うた由にて、今に伯父が所持して居りますれば、旦那の御所望ぢやに、我等に授けてくだされと申さば、いやとは申されぬでござりませう。」と、見た様

にうまう咄せば（『親仁形氣』卷三の二）（傍線引用者）
その他、『癡人伝』卷二の万金丹が、妓女富に誘われ、芝居裏の
ほうで散歩する。

心なかふ茂りたる夏草の陰より雲つくやふなる男一人、富かう
しろよりしつかと抱付に、富ハあれくとうつぶくとたん、手
早く櫛笄ぬきとつてうろつく万金丹をつき飛し行方しらず成に
けり。サア此跡かどよミ出して首飾ハ五十兩程のものしやとゆ
すりぬかれ、多からぬ万金丹か箔をはがして金七両式歩出して
あつかひになつて仕まひぬ。（『癡人伝』卷二）（傍線引用者）

『癡人伝』卷二では、万金丹が、妓女富と散歩したところ、富の
装飾品が見知らぬ男によつて奪われたことが、事件の始まりである。
つまり、事件の発端において、『世間狙』五之卷一が、『親仁形
氣』卷三の二、『癡人伝』卷二と異なるため、『世間狙』五之卷一の
狐釣りに関する設定は、『親仁形氣』卷三の二、『癡人伝』卷二では、
一切確認できない。

『世間狙』五之卷一の狐釣りを見物するという物語の展開に関し
て、次のような設定が見られる。

一回 昔は抹香けむたからぬ夜咄¹ 吝嗇にかたまる古狐もうま
臭ひ趣向の捨畧にかゝる遊びは下野の殺生石

（『世間狙』五之卷の目録）（傍線引用者）

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

集銭出しの夜食があれば大事の用を忘れたと逃げていぬれど。¹
振舞とさへいへば蛇の鮓でものがさず。是はよい所へ参りまし
たと上座にすはり。御亭主御勝手は存ぜぬが替ましやうかと千
枚張の頬の皮。にくまぬ者はなけれど年に免じていひてもなく。
（中略）²今にもあれ玉藻の前が二度の勤にて御惱ならせられた
時。（中略）町人衆の慰みにはちと心外にござれど段々の懇望
と有ゆへ。³明晩今一度釣てお目にかけて申そう。重ねてはきつと
なりませぬと。きつい恩にさせられましたとしたり顔にて咄せ
ば。七左衛門大きに悦びそれは段々の御はたらき。左様な重い⁴
事を雇ひ賃なしに見物いたすは全く其元のお影ゆへ。（中略）
そりや相図じやと走りつまづきてかけ付れば。狐は釣らで⁵浪人
助兵衛刀の反を打て声あらくしく。扱は三人の者ども身が秘
事にしてつゝしむ所を。磯右衛門が忍びて来りしはちんこの呪
を見届ん結構よな。⁵年かさの七左衛門とやらそれへ出よ。無躰
に望みて今宵の催しを致して此仕合せは。汝が所為と相見ゆれ
ば通すまじと詰かくるに。七左衛門大きにあはて。なんくの
誓文町人の義なれば狐釣の伝授覚へて何にいたさん。とかく磯
右衛門がはやまりしゆへとこんくはいのたらぐいふて誤つた
稲荷様の三人が躰。⁵浪人中く聞入ずいやく何事によらず利
欲にふけるが町人のつね。身が秘伝も覚へたら銀もうけにもな

邪念を捨てて。

らんかと思ひ某をたばかりしなり。弓矢八まん堪忍せぬとおど
り上つて鳥井もこへんずいきほひを。(中略) 日比の咨さも刀
におそれ折入て頼めば。兩人畏まつて皆連立て祇園町の一方
へなりこみ。夜の明ぬうちからの酒盛。浪人も打くつろぎて夜
寒をはらふ鶏卵酒に鍋焼よと社人のいなり喰。どうもかやうな

さて、『世間狙』五之巻一では、三浦介兵衛、玉藻の前というよ
うな人名が使用されていることからみれば、狐釣りの設定が、三浦
介、玉藻前と関連していると考えられる。

形で昼中に宿もとへも帰られず。七左殿とても御馳走に芝居
を仰付られいと声かけられて。それは御用捨といはゞ又おこり
かねぬいぶり者と。いかやうにもとしぶくに臺所へいひ付て棧
敷をとらせ

(『世間狙』五之巻一)(傍線引用者)

以下の六点が、『世間狙』五之巻一の狐釣りを見物するという物
語の展開の特徴として挙げられる。

- 1 咨嗚な七左衛門が、狐にたとえられる。
- 2 七左衛門が、二度の勤めで玉藻前に化した狐を退治すると
いう偽りに騙される。
- 3 狐にたとえられた七左衛門が、狐釣りを見物する。
- 4 七左衛門が、雇い賃を払わずに狐釣りが見物できることを
喜んでいる。
- 5 見物人としての七左衛門が、狐釣りをする三浦介兵衛に責
められる。
- 6 七左衛門が、雇い賃を払わずに狐釣りを見物しようとする

玉藻前と関連し、三浦介が狐を退治する内容は、早くも室町物語
『玉藻前物語』や『玉藻の草子』、『玉藻前』で見られる。今現在29
種類の『玉藻前』諸本が現存している。川島朋子は、「室町物語
『玉藻前』の展開——能(殺生石)との関係を中心に——」^①で、「諸
本における題名の表記は一樣でないが、本稿ではこの一連の物語を
『玉藻前』と総称することとする」と記述したため、本稿では、川
島朋子の命名の仕方にしたがい、室町時代の玉藻前と関連する『玉
藻前物語』、『玉藻の草子』、『玉藻前』等の物語を、『玉藻前』と総
称する。

現存している29種類の『玉藻前』諸本の内容及び分類に関して、
前掲の川島朋子の論文で、すでに詳細に検討されている。それ故、
そのような結論に至った論拠は、前掲の川島朋子の論文にゆずらう
と考えている。川島朋子の論説によれば、『玉藻前』の狐釣りに関
する内容は次の通りである。

院は病に伏し、その病状は日々重くなる。典薬頭も世の常の病
気ではないと判断し、高僧を召して祈祷が行われるが、快復の

兆しはない。陰陽頭・安倍泰成は、この御悩は玉藻前の仕業であり、その正体は下野国那須野に住む八百歳を経た丈七尋、尾二つある狐であると占う。そして泰山府君の祭礼において玉藻前に御整取りの役をさせるようにと言う。命じられた玉藻前は祭礼半ばにその姿を消す。その狐を退治するため、上総介、三浦介に院宣が下るが、なかなか仕留めることができない。一度各々本国へ帰り、それぞれに対策を練って再び試みるが、やはりうまくいかず、神仏に祈る。すると三浦介の夢に玉藻前が現れ、涙ながらに命乞いをする。目覚めた三浦介は見事に狐を射止めた。

〔室町物語「玉藻前」の展開——能（殺生石）との関係を中心——〕（傍線引用者）

『世間狙』五之巻一でも、『玉藻前』でも、狐釣りという事件の発端が、玉藻前に化けた狐を退治することである。だが、『世間狙』五之巻の目録によれば、五之巻一では、皆に憎まれている吝嗇な七左衛門が、「古狐」にたとえられる。『玉藻前』では、三浦介に射られた狐が本当の狐である。つまり、人間が狐にたとえられるという点において、両者は異なる。

さらに、『世間狙』五之巻一の七左衛門や磯右衛門、墨五郎が、三浦介兵衛の狐釣りを見物することと違い、室町物語『玉藻前』で

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

〔表1〕

『世間狙』五之巻一	『親仁形氣』三之巻二	『癡人伝』巻一	『玉藻前』
かたりの対象となる人物が、けちである。	○	○	×
かたりの対象となる人物を騙すため、わなの仕掛け人が存在する。	○	○	×
かたりの対象となる人物が、わなにひっかかる。	○	○	×
かたりの対象となる人物が、狐にたとえられる。	×	×	×
かたりの対象となる人物が、玉藻の前に化けた狐を退治するという偽りに騙される。	×	×	△（*）
かたりの対象となる人物が、狐釣りを見物する。	×	×	×
かたりの対象となる人物が、狐釣りで自分の下心が叶えることを喜んでいる。	×	×	×
かたりの対象となる人物が、狐釣りをする人に責められる。	×	×	×
かたりの対象となる人物が、これまで邪念を捨てて。	×	×	×

（*）「玉藻の前に化けた狐を退治する」という事件の発端において、『世間狙』五之巻一は、『玉藻前』と一致している。だが、『玉藻前』では、「かたりの対象となる人物」が存在していない。

は、狐釣りの見物人が設定されていない。そのため、『世間狙』五之卷一の狐釣りの見物人にまつわる設定は、全部室町物語『玉藻前』で見られない。

よって、玉藻前に化けた狐を退治するという設定を除ければ、『世間狙』五之卷一の狐釣りの場面は、直接室町物語『玉藻前』と関連していないと考えられる。

『世間狙』五之卷一の七左衛門にまつわる狐釣りという物語の展開を整理し、狐釣りの場面における、『世間狙』五之卷一と諸作品との関連性を【表1】にまとめて示す。

【表1】のように、かたりの対象となる人物がけちである、わなの仕掛け人の存在、かたりの対象となる人物がわなにひっかかるという設定において、『世間狙』五之卷一は、『親仁形氣』卷三の二、『癡人伝』卷二と同じである。また、玉藻前に化けた狐を退治するという設定において、『世間狙』五之卷一は、室町物語『玉藻前』と一致する。

しかし、「狐釣りを見物する」という『世間狙』五之卷一の物語を貫く、メインに据えた事件に関する詳細な設定において、『世間狙』五之卷一は、『親仁形氣』卷三の二、『癡人伝』卷二、室町物語『玉藻前』と異なる。

二 狂言『釣狐』、謡曲『殺生石』、

浄瑠璃作品『殺生石』との関連性

森山重雄は、『上田秋成初期浮世草子評釈』¹²⁾で、『世間狙』五之卷一が、「謡曲『殺生石』の戯画であると共に、狂言『釣狐』の戯画でもある」と指摘すると同時に、本文における『世間狙』五之卷一と、狂言『釣狐』、謡曲『殺生石』との関連箇所を頭注の形で記した。ところが、『上田秋成初期浮世草子評釈』での指摘は、個々の趣向の類似性を指摘する段階で止まっている。

天竺にては班足太子の塚の神。大唐にては幽王の后。我朝にては鳥羽院の上臈と化したりしも。はては那須野の叢にかくれて殺生石となりけるとや。(中略) 其夜亭主と二人右の浪人衆同道にて嵯峨野の方へ参つて釣所を見ましたが。中く貞五郎や藤九郎が釣狐の狂言見るやうな物ではない。正真の伯藏主いなかやれの畜生足が人間とは又格別のとり廻し。畏にかゝるまでのおもしろさどふもはやいはれた物ではないと。(中略) 然らばどうぞ今一度明日参つて頼んで見ましやうが得心あればよござりますが。其夜は約束かたき石となつて犬追物の杖つきならしかへられぬ。(『世間狙』五之卷一)(傍線引用者)

森山重雄は、『上田秋成初期浮世草子評釈』の頭注で、「伯藏主」、

「犬追物」と狂言『釣狐』との関連性及び「我朝にては鳥羽院の上臈と化したりしも」、「約束かたき石となつて」、「犬追物」と謡曲『殺生石』との関連性を指摘した。確かに、「伯藏主」、「犬追物」、「我朝にては鳥羽院の上臈と化したりしも」、「約束かたき石となつて」というような個々の趣向が、狂言『釣狐』、謡曲『殺生石』と関連しよう。しかしながら、周知のように、狂言『釣狐』、謡曲『殺生石』が本当の狐を退治する物語なので、「世間狙」五之巻一のかたりの対象となる人間の性格などに関する描写は、狂言『釣狐』、謡曲『殺生石』にない。なお、かたりの対象が人間であるが、狐にたとえられ、狐釣りの見物人になるという『世間狙』五之巻一の物語を貫く、メインに据えた事件にかかわる重要な展開・特徴は、狂言『釣狐』、謡曲『殺生石』では見られない。その他、『世間狙』五之巻一の玉藻前に化けた狐を退治するという事件の発端は、謡曲『殺生石』の設定と似通っているが、狂言『釣狐』の設定と関連していない。

ところで、玉藻前と関連し、三浦介の狐退治が扱われた演劇作品は、謡曲『殺生石』のみならず、紀海音の浄瑠璃作品『殺生石』も挙げられる。

浄瑠璃作品『殺生石』五段目では、玉藻前に化けた狐を退治するため、三浦之介、上総之介らが、那須野へ狐退治に向かう。重虎の

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

【表2】

	「世間狙」五之巻一	狂言『釣狐』	謡曲『殺生石』	浄瑠璃作品『殺生石』
かたりの対象となる人物が、けちである。	×	×	×	×
かたりの対象となる人物を騙すため、わなの仕掛け人が存在する。	×	×	×	×
かたりの対象となる人物が、わなにひっかかる。	×	×	×	×
かたりの対象となる人物が、狐にたとえられる。	×	×	×	×
かたりの対象となる人物が、玉藻の前に化けた狐を退治するという偽りに騙される。	×	×	△(＊)	△(＊)
かたりの対象となる人物が、狐釣りを見物する。	×	×	×	×
かたりの対象となる人物が、狐釣りで自分の下心が叶えることを喜んでいる。	×	×	×	×
かたりの対象となる人物が、狐釣りをする人に責められる。	×	×	×	×
かたりの対象となる人物が、これまでの邪念を捨てて。	×	×	×	×

(＊) 「玉藻の前に化けた狐を退治する」という事件の発端において、『世間狙』五之巻一は、謡曲『殺生石』、浄瑠璃作品『殺生石』と一致している。だが、謡曲『殺生石』、浄瑠璃作品『殺生石』では、「かたりの対象となる人物」が存在していない。

考えて犬を原に放すと、狩りたてられて狐もたまらず、姿を現す。明王諸天の責めに苦しみ、はやく殺してくれと頼む狐に、二人は、悪心を翻えし、善心になりさえずれば、罪は救われると、邪正一如の理を説く。狐は悟りを得、畜生道を逃れたことをよるこび、今より王道守護しようと言って、その形は約束の堅さを示す石と変わる。

作品に即してみれば、玉藻前に化けた狐を退治するという事件の発端において、『世間狙』五之巻一は、浄瑠璃作品『殺生石』と一致する。ところが、浄瑠璃作品『殺生石』では、現場で狐釣りを見物する人がいない。また、釣られたのは本当の狐である。さらに、狐釣りの見物人がいないため、見物人にまつわる場面は設定されていない。それ故、『世間狙』五之巻一の物語の展開にかかわる重要な特徴からみると、『世間狙』五之巻一は、浄瑠璃作品『殺生石』と相違する。

『世間狙』五之巻一の七左衛門にまつわる狐釣りという物語の展開を、狂言『釣狐』、謡曲『殺生石』、浄瑠璃作品『殺生石』の狐釣りの場面と比較し、その関連性を【表2】にまとめる。

【表2】のように、玉藻前に化けた狐を退治するという設定において、『世間狙』五之巻一は、謡曲『殺生石』、浄瑠璃作品『殺生石』と類似している。ところが、かたりの対象となる人物がけちである、わなの仕掛け人の存在、かたりの対象となる人物がわなにひ

つかかる、かたりの対象となる人物が、狐にたとえられ、狐釣りの見物人になり、狐釣りをする人に責められ、これまでの邪念を捨てるといふ『世間狙』五之巻一の物語を貫く事件に関する詳細な設定において、『世間狙』五之巻一は、狂言『釣狐』、謡曲『殺生石』、浄瑠璃作品『殺生石』と関連していない。

三 浄瑠璃作品『囃袂』、歌舞伎作品『囃袂』との関連性

前述したように、人名の使用からみれば、『世間狙』五之巻一の狐釣りの場面と、三浦介、玉藻前との関連性が考えられる。『歌舞伎年表』¹³⁾や『義太夫年表』¹⁴⁾によれば、『世間狙』の開板願書が出された時期明和元年十一月までに、上方で上演された演劇作品の中で、玉藻前と関連し、三浦介の狐退治が設定された演劇作品は、謡曲『殺生石』、浄瑠璃作品『殺生石』だけではなく、浄瑠璃作品『囃袂』、歌舞伎作品『囃袂』も挙げられる。

残念ながら、現存する台本は、浄瑠璃作品『囃袂』のみなので、本稿では、『世間狙』五之巻一の内容を、浄瑠璃作品『囃袂』の内容と比較し、両者の関連性を検討する。

『義太夫年表』によれば、宝暦元年（一七五一）正月に、大坂の豊竹座で『那須野狐師玉藻前囃袂』が上演された。

『上田秋成初期浮世草子評釈』の頭注では、個々の趣向の類似における『世間狙』五之巻一と浄瑠璃作品『曠袂』との関連性が述べられている。

(37) 玉藻の前が、二度の勤にて御悩ならせられた時『玉藻前曠袂』によれば悪狐が、玉藻前を殺してその姿を借りたことになつており、二度の勤とは、この悪狐が姿を借りたのちをいうか。

(『上田秋成初期浮世草子評釈』(傍線引用者) 『上田秋成初期浮世草子評釈』の頭注によると、『世間狙』五之巻一の「二度の勤」は、浄瑠璃作品『曠袂』の悪狐が、玉藻前を殺してその姿を借りた後のことを指していると指摘した。ところが、浄瑠璃作品『曠袂』には、「悪狐が、玉藻前を殺してその姿を借りた」という設定がない。

彼塚の神は此狐仏法に仇をなさんと。唐土にては幽王の后。褒姫と頭はれ国を亡し。又日本を心がけ。東山道下野ノ国那須野といへる広野に住^ミ。折を窺ひ居たりしが。聖躰の弱を見入レ玉藻の前と変化して。玉躰に近カ付キしか共。

(浄瑠璃作品『曠袂』一段目)(傍線引用者) 本文から見ると、『世間狙』五之巻一の「二度の勤」は、浄瑠璃作品『曠袂』一段目の悪狐が、まず唐土で幽王の后褒姫になって、国を亡ぼし、それから、日本に来て、隙を見て、玉藻前に変化し、

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

鳥羽院に近付くという設定を示唆している。

さて、浄瑠璃作品『曠袂』では、安部泰成は、玉藻前が万年近い狐であり、唐土において国を亡ぼし、日本では玉藻前となり、帝に近付いたが、力が神仏の守りに及ばず、今那須野の原に逃げていったと占う。そして、野干(狐)を退治するために百日間犬で狩りをするべきであると薄雲皇子、通忠卿に進言する。そこで、通忠卿は三浦之助、上総之助に猛虎丸という名剣を渡し、狐退治を命じる。三浦之助、上総之助は、兵士を率い、那須野へ向かう。暴悪不道の皇子は、那須野の狐釣りを見物しようと、黒瀬判官らを連れてくる。

² 又日本を心がけ。東山道下野ノ国那須野といへる広野に住^ミ。折を窺ひ居たりしが。聖躰の弱を見入レ玉藻の前と変化して。

玉躰に近カ付キしか共。君の聖運仏神ノ加護。カラなく逃去て那須野の古栖に隠れ住。通力の狐なれば世の常とは事かはり。百日犬にて狩を試。御退治仰付ケらるへしと。言語は水の流る、ごとく詳にぞ奏しける。右大弁を始めとなみある人々肝をけし。奇異の思ひをなしにけり。皇子は心に独々み是を次手に都の武士。国々へ離散させ跡にて事を計らんと。うはべは忠義の空驚き。泰成が教のごとく退治延引すべからず。

(浄瑠璃作品『曠袂』一段目)(傍線引用者)

暴悪不道³の皇子の勢ひ。那須野の狩を遊覧と。飼に飼たる黒の駒。袞龍の御衣まくり手に。手綱かいくくり歩ませし姿は天の鞭駒に。またがり給ふ素戔鳴の尊の昔もかくやらん。(中略)⁵三浦之助大音上。玉藻の前を狐といふたは泰成が謀。王位を奪¹国土を騒¹す悪¹ク狐とは皇子の事。今此所へおびき寄せかくのごとく取囲生ケ捕にせん為也計略の油上わなにか、つた皇子の自滅。サアく繩をかくられよと詞を揃へ取まいたり。皇子は面¹ン色筋をあら、げ。(中略)玄翁く打黙き。悪に強きは善の種逆縁ながら引導して皇子の魂魄いさめんと。石に向つて闇の父。頓断如破石弥陀佛と拂子を以つて打ければ。頂上より真¹ツ二つ破れしは成仏得脱の。印シ

(浄瑠璃作品『曠袂』五段目)(傍線引用者)

以下の六点が、浄瑠璃作品『曠袂』の狐釣りを見物するという物語の展開の特徴として挙げられる。

- 1 悪逆非道の薄雲皇子が、狐にたとえられる。
- 2 薄雲皇子が、二度の勤めで玉藻前に化けた狐を退治するといふ偽りに騙される。
- 3 狐にたとえられた薄雲皇子が、狐釣りを見物する。
- 4 薄雲皇子が、狐釣りで都の武士を国々へ離散させ、謀反が一層実行しやすくなることを喜んでいる。

5 見物人としての薄雲皇子が、狐釣りをする三浦之助に責められる。

6 玄翁の引導で、大石にとどまる薄雲皇子の魂魄が、謀反を企むという邪念を忘れ、成仏得脱になる。

このように、かたりの対象となる人物が、狐にたとえられ、玉藻前に化けた狐を退治するという偽りに騙され、狐釣りの見物人になり、狐釣りをする人に責められ、これまでの邪念を捨てるといふ『世間狙』五之卷一の物語を貫く事件に関する詳細な設定において、『世間狙』五之卷一の七左衛門が狐釣りを見物する場面は、浄瑠璃作品『曠袂』の薄雲皇子が狐釣りを見物する場面と合致する。

その上、浄瑠璃作品『曠袂』四段目には、安部泰成は、玉藻前を隠し部屋から出し、上総之助らに野干退治が、実は皇子を討とうとする計略だといふ秘密を明かす場面がある。

ヲ、其時に此泰成。皇子に事を隠さん為。狐の所為といひふらし。則チ野干退治と名付ケ。両助を出ッ陳さ¹せ。東で皇子を討¹タさん計略。(浄瑠璃作品『曠袂』四段目)(傍線引用者)

浄瑠璃作品『曠袂』では、薄雲皇子を騙すため、安部泰成がわなの仕掛け人になる。つまり、かたりの対象となる人物を騙すため、わなの仕掛け人が存在するという点において、『世間狙』五之卷一は、浄瑠璃作品『曠袂』と同じである。

【表3】

『世間狙』五之卷一	浄瑠璃作品 『曠袂』
かたりの対象となる人物が、けちである。	×
かたりの対象となる人物を騙すため、わなの仕掛け人が存在する。	○
かたりの対象となる人物が、わなにひっかかる。	○
かたりの対象となる人物が、狐にたとえられる。	○
かたりの対象となる人物が、玉藻の前に化けた狐を退治するという偽りに騙される。	○
かたりの対象となる人物が、狐釣りを見物する。	○
かたりの対象となる人物が、狐釣りで自分の下心が叶えることを喜んでいる。	○
かたりの対象となる人物が、狐釣りをする人に責められる。	○
かたりの対象となる人物が、これまでの邪念を捨てる。	○

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

また、浄瑠璃作品『曠袂』一段目では、薄雲皇子が「泰成が教のごとく退治延引すべからず」と言う場面が見られる。さらに、浄瑠璃作品『曠袂』五段目には、「皇子の勢ひ。那須野の狩を遊覧」という設定がある。よって、かたりの対象となる薄雲皇子は、安部泰成が仕掛けたわなにひっかかると言えよう。即ち、かたりの対象となる人物が、わなにひっかかるという設定において、『世間狙』五之卷一は、浄瑠璃作品『曠袂』と一致している。

ところが、『世間狙』五之卷一の咨嗟な七左衛門と違い、浄瑠璃作品『曠袂』の悪逆非道の薄雲皇子が、謀反を企んでいる。

ここまで『世間狙』五之卷一と浄瑠璃作品『曠袂』との類似性に関する分析結果を【表3】にまとめる。

【表3】のように、かたりの対象となる人物が、けちであるという設定を除けば、『世間狙』五之卷一の物語を貫く事件に関する詳細な設定において、『世間狙』五之卷一は、浄瑠璃作品『曠袂』の狐釣りの場面と一番強い関連性を持っている。

加えて、『歌舞伎年表』によると、宝暦元年正月二十六日に、京都の都座で、『玉藻前曠の袂』が上演された。

宝暦元年（一七五一）

正月廿六日、京、都座、二の替「玉藻前曠の袂」。

（中略）

二の替「けいせい逢坂山」と看板出せしも、大阪にて玉藻前の新浄るり、一月十四日に出せしより、其の狂言を出す由。小番附に口上書あり。
（『歌舞伎年表』）（傍線引用者）

『歌舞伎年表』の記録によると、歌舞伎作品『囃袂』は、浄瑠璃作品『囃袂』から影響を受け、上演された演目である。

浄瑠璃作品『囃袂』四段目には、安部泰成は、玉藻前を隠し部屋から出し、上総之助らに野干退治が、実は皇子を討とうとする計略だという秘密を明かす場面がある。

悪き皇子の御工。帝位を奪ひ自を后に立ん心にて。松嶋遊覧と偽り。東の勢イを催し給ふを。（中略）ヲ、其時に此泰成。皇子に事を隠さん為。狐の所為といひふらし。則チ野干退治と名付ケ。両助を出ッ陳さ」せ。東で皇子を討ッさん計略。

（浄瑠璃作品『囃袂』四段目）（傍線引用者）
『歌舞伎評判記集成』第二期第四巻に所収されている寛延四年（二七五）の『役者翁叟鏡』^⑤では、歌舞伎作品『囃袂』四段目の内容に関する記述が見られる。

中山新十郎 都座

（略）新十殿役、玉もの前囃の袂に、かつさの介と成。（中略）
四段目かつさの介にて、あべのやすなりがやかたにて、勅使の右大弁が首を討、玉もの前の様子を聞、ないし所をおがみ、や

すなりが心底を聞いて悦び、うす雲の皇子をうたんと、やかたがいちといひたて、もり山へのほつそくざりとは「たいよいぞく」
山下又太郎 都座

（略）此度三浦之助と成。（中略）四段めは三浦助やすなりが館へ来り、我妹がしんていをさぐり、殺さんとするを、右大弁にとめられ、縄付をわたし、後にかづさの助入こみたるをとがめ、あらずひ、しうとやすなりが物語を聞いて、心底をとき、王子松島遊覧と聞、やかたたいちといひ立、発足迄出来ましたく、
藤岡大吉 都座

（略）此度あべのやすなりと成。（中略）四段目の切に又やすなり役にて、玉ものを隠しおきし一通りをかづさの助にかたり、皇子むほんゆへ狐といつはりしおもむきをいひて、それより両助をやかんたいちと名付、皇子の討手にはつそくさせ、
（『役者翁叟鏡』）（傍線引用者）

右記の『役者翁叟鏡』に残された歌舞伎作品『囃袂』四段目の内容に関する記述からみれば、歌舞伎作品『囃袂』四段目の野干退治という計略の設定は、浄瑠璃作品『囃袂』四段目の場面設定と同じである。

『歌舞伎年表』では、歌舞伎作品『囃袂』が、浄瑠璃作品『囃袂』

から影響を受け、上演された演目だと記されている。さらに、歌舞伎作品『曠袂』四段目と浄瑠璃作品『曠袂』四段目の場面設定からみれば、両者とも謀反を企む皇子を討つため、野干退治という略略を立てたのである。よって、歌舞伎作品『曠袂』の狐釣りに関する物語の展開は、浄瑠璃作品『曠袂』の狐釣りの場面と同じだと推測できる。そのため、『世間狙』五之巻一の狐釣りの場面は、歌舞伎作品『曠袂』の狐釣りの場面と強い関連性を持っていると言えるだろう。

まとめ

以上、『世間狙』五之巻一に関する先行研究の研究成果を踏まえ、『世間狙』五之巻一を貫く狐釣りを見物するという物語の展開を、『親仁形氣』巻三の二、『癡人伝』巻二、室町物語『玉藻前』、狂言『釣狐』、謡曲『殺生石』、浄瑠璃作品『殺生石』、演劇作品『曠袂』と比較し、その類似性を究明することを意図して論を進めてきた。

『世間狙』五之巻一は、かたりの対象となる人物がけちである、わなの仕掛け人の存在、かたりの対象となる人物がわなにひっかかるという設定において、『親仁形氣』巻三の二、『癡人伝』巻二と同じである。また、玉藻前に化けた狐を退治するという設定において、『世間狙』五之巻一は、室町物語『玉藻前』と一致する。しかし、

「狐釣りを見物する」という『世間狙』五之巻一の物語を貫く、メインに据えた事件に関する詳細な設定において、『世間狙』五之巻一は、『親仁形氣』巻三の二、『癡人伝』巻二、室町物語『玉藻前』と異なる。

その他、『世間狙』五之巻一は、玉藻前に化けた狐を退治するという設定において、謡曲『殺生石』、浄瑠璃作品『殺生石』と類似している。ところが、かたりの対象となる人物が、狐にたとえられ、狐釣りの見物人になり、狐釣りをする人に責められ、これまでの邪念を捨てるという狐退治に関する設定から見れば、『世間狙』五之巻一は、狂言『釣狐』、謡曲『殺生石』、浄瑠璃作品『殺生石』と関連していない。

しかしながら、かたりの対象となる人物が、けちであるという設定を除けば、『世間狙』五之巻一と浄瑠璃作品『曠袂』は、わなの仕掛け人の存在、かたりの対象がわなにひっかかるという設定において類似しているのみならず、かたりの対象となる人物が、狐にたとえられ、狐釣りの見物人になり、狐釣りをする人に責められ、これまでの邪念を捨てるという狐退治の展開においても似通っている。

結論をまとめて言うと、『世間狙』五之巻一の狐釣りの場面は、浄瑠璃作品『曠袂』の狐釣りの場面と一番強い関連性を持っている。

なお、『歌舞伎年表』及び『歌舞伎評判記集成』の『役者翁叟鏡』に残された記述によれば、歌舞伎作品『曠袂』の狐釣りに関する物語の展開は、浄瑠璃作品『曠袂』の狐釣りの物語の展開と同じだと推測できる。よって、『世間狙』五之巻一の狐釣りの場面は、歌舞伎作品『曠袂』の狐釣りの場面と強い関連性を持っていると言えよう。この意味では、『世間狙』五之巻一の狐釣りの場面は、演劇作品『曠袂』と最も強い関連性を持っていると言えよう。

物語の展開における『世間狙』と演劇作品との関連がさらに存在しているため、上田秋成が、『曠袂』のような浄瑠璃作品としても、歌舞伎作品としても上演された演劇の人気作の名場面を、巧妙に『世間狙』の物語の展開に織り交ぜる意図を究明することを、今後の課題としたい。

注

- ① 『諸道聴耳世間狙』（上田秋成全集）第七巻、平成二年八月二十五日、中央公論社。
- ② 『浮世親仁形氣』（近代日本文学大系第五巻『八文字屋集』、昭和四年二月八日、国民図書株式会社）。
- ③ 『当世癡人伝』（上方藝文叢刊10『浪華粹人伝』、昭和五十八年一月三十一日、上方藝文叢刊行会）。底本（江戸通油町鶴屋喜右衛門・京都御池上ル町吉田新兵衛・大阪心斎橋南久宝寺町角塩屋長兵衛、寛政七年正月刊、天理図書館蔵）。

④ 謡曲『殺生石』（新日本古典文学大系57『謡曲百番』、平成十年三月二十七日、岩波書店）。底本（黒沢源太郎刊観世黒雪正本、寛永七年、架蔵）。

⑤ 狂言『釣狐』（日本古典文学大系43『狂言集』下、昭和四十一年十二月五日、岩波書店）。

⑥ 『那須野狩人玉藻前曠袂』（『年報』第八号、平成元年三月三十日、実践女子大学文芸資料研究所）。底本（江戸鱗形屋孫兵衛板・大坂西沢九左衛門板、寛延四年刊、国立国会図書館蔵）。

⑦ 浄瑠璃作品『殺生石』（『紀海音全集』第四巻、昭和五十四年十二月十五日、清文堂）。底本（正本屋西沢九左衛門板、享保初年頃、大阪府立中之島図書館蔵）。

⑧ 高田衛『上田秋成年譜考説』（昭和三十九年十一月、明善堂書店）によると、上田秋成が享保十九年（一七三四）に大阪で生まれ、明和元年十一月までに一度も江戸に下ったことがなく、主な生活拠点が上方に集中していた。

⑨ 高田衛『上田秋成研究序説』（昭和四十三年六月、寧楽書房）。

⑩ 徳田武『秋成の隠微——『諸道聴耳世間狙』に即して——』（日本書誌学大系51『日本近世小説と中国小説』、昭和六十二年五月二十五日、青裳堂書店）。

⑪ 川島朋子『室町物語『玉藻前』の展開——能（殺生石）との関係を中心に——』（『国語国文』第七十三巻第八号、平成十六年八月二十五日、中央図書出版社）。

⑫ 森山重雄『上田秋成初期浮世草子評釈』（昭和五十二年四月三十日、国書刊行会）。

⑬ 『歌舞伎年表』第三巻（昭和三十三年三月三十一日、岩波書店）。

⑭ 『義太夫年表』近世篇第一巻（『延宝〜天明』（昭和五十四年十一月二十

三日、八木書店)。

⑮ 『役者翁叟鏡』(『歌舞伎評判記集成』第二期第四卷、昭和六十三年十一月七日、岩波書店)。底本(八文字屋八左衛門板、寛延四年三月、東京芸術大学図書館蔵)。

(付記)

本文引用に際して、本文中のルビを省略した。

なお、本稿は、二〇一〇年度総合演習(二〇一〇年十二月四日、於同志社大学今出川校地明徳館M308)における口頭発表に基づくものである。席上、貴重な御指導や御教示を賜りました方々に、改めて心より御礼を申し上げます。